

## 全学教養科目「名大の歴史をたどる」

山口 拓史

## 1. はじめに

名古屋大学（以下、名大という）では、いわゆる自校史教育の取り組みを1999年度から実施しており、現在にいたるまで試行錯誤を重ねている。名大で自校史教育を実施することになった背景として4点を指摘できる。

第一に『名古屋大学五十年史』刊行終了（1995年度）後に大学アーカイブズ組織として名古屋大学史資料室（現在の大学文書資料室の前身組織）が設置されたこと、第二に当時すでに私立大学を中心に自校史教育の先行事例があったこと、第三に学内の教員から自校史教育開講の提言がなされたこと、第四に学内の初任職員研修プログラムに自校史講義が組み込まれたことがそれである。

本稿では、名大における自校史教育である全学教養科目「名大の歴史をたどる」（以下、本講義という）の概要および課題等について述べたい。

## 2. 本講義の内容

本講義は、I期（1年前期）開講2単位の講義で、全学部を対象としたものである。本講義は、「大学でどう学ぶか」や「キャリア形成論」とともに大人数対象科目と位置づけられ、他の全学教養科目の受講者数の2.5倍に相当する200名までの受講者登録が認められている。同じ全学教養科目の中で、大人数対象のものとはそうでないものに区別されている理由は、前者がいわゆる一般

教養とは異なる準備教育的な性格を有していると考えられているためである。

本講義では、半期15回の授業を「総説編」と「各説編」の二つに分けて展開している。

総説編では、日本の高等教育史を制度変遷の面から時系列的に取り上げる中で、名大の歴史について概括的に講義を行っている。その際のテーマは、次の通りである。

1. 洋学の受容と専門教育制度の整備 - 【名古屋大学の源流】
2. 旧制大学の成立と展開 - 【医科大学から名古屋帝国大学へ】
3. 旧制高等教育諸学校の成立と展開 - 【新制名古屋大学の包括学校】
4. 新制大学の成立 - 【旧制名古屋大学から新制名古屋大学へ】
5. 大学における戦後改革 - 【名古屋大学の現状】

一方、各説編では、特定のテーマを設定することによって、総説編における通史的な観点とは異なる観点から名大の歴史を見つめ直すとともに、今後の展望について考察を行っている。この各説編では、オリジナル教材である名大史ブックレットシリーズ（後述）がテキストとして使用される。2007年度における各説編全7回のテーマは、次の通りである（カッコ内の数字はブックレットの巻数）。

1. 名大祭のあゆみ（7）
2. 名古屋大学スポーツの歩み（3）

3. 草創期名古屋大学と渋沢元治初代総長 (6)
  4. 名古屋大学運営の基本姿勢 (総長講義)
  5. 名大の寄付建物 (4 & 9)
  6. 名大最初の外国人教師 (5)
  7. 名大キャンパス史 (2 & 短編ムービー)
- ### 3. 教育上の工夫

本講義での教育上の工夫としては、既述の「総説編」と「各説編」の二本立て構成のほかに、オリジナル教材の導入、総長による講義などを挙げる事ができる。

オリジナル教材については、総説編の各講義において共通に参照するような基本的資料をあらかじめ冊子体にまとめた『コースパケット』と呼んでいる教材集がある。同じくオリジナル教材として、受講学生から好評を得ている名大史ブックレット・シリーズがある。既刊 12 巻からなる名大史ブックレットは、主に各説編のテーマに即したテキストとして利用され、受講学生には事前に全巻が無償配付されている (<http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/booklet/> からデジタルブック版の閲覧や pdf データのダウンロードが可能である)。また、名大には広報室が毎月発行する『名大トピックス』という広報誌があるが、大学文書資料室はその裏表紙 1 ページ分の連載コーナー「ちょっと名大史」を担当している (2009 年 3 月現在で全 83 話)。この「ちょっと名大史」は投げ込み教材としても有用であるため、必要に応じて活用している。さらに、オリジナルの視聴覚教材として一話 10 分程度の短編ムービー数話を保有しており、初回ガイダンス時や各説編で必要に応じてそれらを利用している。

また、国立大学法人化した 2004 年度から実施されている総長講義は、受講

学生が総説編での通史的な学習を一通り終えた段階で、総長みずからが大学運営の基本方針などを学生に語りかけ、質疑応答を行うという形式で行われている。通常ほとんどの学生は、入学式あるいは卒業式の際に壇上で話す総長の姿を遠くから見る以外に総長に接する機会を持たない。その総長が講義室内で直接自分たちに語りかけるという総長講義は、少なからずの受講学生にとって貴重な体験として高い評価を受けている。

また、教育上の工夫とは少し異なるが、本講義における評価方法についても簡単に触れておきたい。

例年、本講義における成績は、課題レポートの評価を中心に、出席状況を加味する形で判定している。レポートには必修扱いの「基本課題」と任意扱いの「発展課題」がある。

基本課題は、受講学生が講義一覧から選択した 1 テーマについて、講義内容を 1600 字程度で要約することが求められる。一方、発展課題は、受講学生が任意に設定した名大史のテーマについて、文献調査等を踏まえて 1200 字以上で考察することが求められる。

レポートの採点基準は、次のとおりである。

「優」: 基本課題において、講義内容を十分に理解した上で正確にレポートしており、同時に、発展課題についても積極的に取り組んでレポートしているもの。

「良」: 基本課題において、講義内容を十分に理解した上で正確にレポートしているもの。

「可」: 「良」評価の要件を十分に満たしていないが、単位取得に値するもの。

「不可」: 「良」評価の要件をほとんどあるいは全く満たしておらず、単

位取得に値しないもの。

#### 4. 受講学生の反応

本講義では、毎回授業終了時に感想文用紙の記入・提出を求めている。この感想文から読み取れる受講学生の反応には、いくつかの興味深い点がある。

第一は、「名大の歴史を知るということは今まで思いつかなかったことであり、いい機会だと思う」（1年生）や「入学してはじめての授業で自分が通う大学の歴史を学ぶのはとてもよいことだと思います。…だれに名大のことを聞かれても誇りをもって答えることができるようになりたいです」（1年生）という感想に示されているように、受講学生の多くは自分が在籍する学校の歴史を学ぶという経験を持たないため、大学に入って本講義が開講されていること自体に驚きを感じるとともに、期待を寄せていることである。

第二は、「入学してもう4年になりますが、…今回この講義で『名大の歴史』を学び、卒業した時に名古屋大学について語れる人間になりたいと思います。名古屋大学を誇って話ができるようになれば嬉しいです」（4年生）や「現在の名大に至るまでに数えきれないほどの多くの人々がかかわってきて、私もその一員であることに誇りをもつとともに、この歴史、伝統を後輩たちに伝えることができたらよいと思います」（4年生）というような感想が一定数含まれていることである。自校史教育＝初年次教育という考え方が一般的となっている現状において、本講義が卒業を目前に控えた4年生にとっても魅力ある講義として受け止められているという事実は、自校史教育の可能性を示しているとも考えられる。

近年多くの大学で実施されているように、名大でも受講学生による授業評

価アンケートが実施されている。本講義でも「全学教養科目」用に用意されたマーク方式のアンケートを実施したが、その集計結果の一部を次に示しておく（受講者218名、回答者161名、回答率73.9%【 】内は設問に対して「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した割合を示す）。

問：意欲的・自発的に取り組めたか。  
【67.1%】

問：学習内容を理解できたか。  
【83.2%】

問：知的関心・学習の手掛りを得たか。  
【64.6%】

問：教員の熱意・工夫を感じたか。  
【91.3%】

問：質問・意見の機会はあったか。  
【59.6%】

問：教材・教授法は適切であったか。  
【88.2%】

#### 5. 今後の課題

以上、名大における自校史教育の概要を紹介した。以下では、本講義における課題などの私見を述べておきたい。

##### (1) 講師陣の強化

本講義は、大学文書資料室長が開講する形態をとっているが、各回の講義は専任室員（助教）2名が中心的に担当している。こうした陣容は担当者間の連携が容易であるため、全体としてバランスのとれた授業内容を提供できるという点で有効であろう。しかしその一方で、本講義が初年次における教養教育として今後より多くの学生を対象に開講されるのであれば、講師陣の強化が必要となる。その場合、専任室員の増員という形で対応できる可能性は極めて低いため、そうした方法以外の対応策が求められることになるが、現

時点で有効だと思われる対応策は明確になっていない。

やまぐち たくじ  
(名古屋大学教育学部助教・  
同大学大学文書資料室)

## (2) 準備教育として自校史教育

近年、大学入学前準備教育プログラムを提供する大学が増えている。その内容は、大学教育で求められる基礎学力の確認や高等学校教育の補習教育が想定されていることが多い。一方、この補習教育とは異なる初年次教育（高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるために、主として大学新生を対象に作られた総合的教育プログラム）という言葉も広く普及している。自校史教育は、この初年次教育の枠組みの中で理解されるのが一般的であり、この点については原則的に筆者も異論はない。しかし、あえて述べるならば、自校史教育は初年次教育の中でも極めて準備教育（≠補習教育）的な性格を有していると考えられる。一方で、寺崎昌男氏は「自校教育は歴史を土台にした教養教育」であると繰り返し指摘されているが、この点について筆者も同感である。

以上のことから、自校史教育は、自らの大学の歴史を素材（教材）とした教養教育であり、かつ、自らの大学の歴史を素材（教材）とするという点から準備教育としての有用性が極めて高い初年次教育であるということになるのであろうか。そして、こうした自校史教育（あるいは自校教育）こそは、大学アーカイブズ機能をもつ組織によってのみ最も適切に実施またはコーディネートされうるのではないかと考えている。これが、名大における自校史教育について試行錯誤を重ねた者の一人としての私見であり、今後も自校史教育における試行錯誤を重ねる際の基点である。